Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-11

John Keats におけるギリシア・ローマ神話の影響の研究

松家，理恵

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
1997-02-26
(Date of Publication)
2010-01-19
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙2107
(JaLCDOI)
https://doi.org/10.11501/3129870
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002107

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

[162]

氏名・（本籍）	松家理恵（まつや りえ）　（兵庫県）
博士の専攻分野の名称	博　士（学　術）
学位記番号	博ろ第75号
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与の日付	平成9年2月26日
学位論文題目	John Keatsにおけるギリシア・ローマ神話の影響の研究
審査委員	主査　教授　田中雅男 教授　渡邊孔二　教授　眞方忠道 教授　橋本隆夫　助教授　齊藤重信

論文内容の要旨

本論文は，ロマン派の詩人John Keatsの詩世界をギリシア・ローマ神話の影響という観点から論じたものである。キーツと神話の関係は，ロマン派の詩人たちの中でも，際立って独自のものであるにもかかわらず，神話の影響を中心課題とした研究は従来より極めて少なかった。論者は，それに対して，キーツの古代への関心と作品に現れた神話の影響を，彼の全時期の作品にわたって検討し直し，その推移の中に詩人の成長過程を探ろうとする。全体は400字詰原稿用紙換算600枚，序章，本編6章，注，参考文献からなる。以下，章を追って要旨を述べる。

序章

従来のキーツ研究の多くは，個々の作品解釈に向けられ，神話への関心は注釈の域を超えるものではなかった。それに対して，本論では，「キーツによる神話解釈の解釈」を試みることによって，詩人の成長を跡付けたいとし，詩人の描くギリシア・ローマの神話世界の情景や神々の姿が，制作年代を追うにつれて，官能的快楽に満ちた楽園世界から，不安と苦痛に満ちた闇の世界へと，そして語り口においても，遙かな世界への憧憬と共感から，神々への内省的な問いかけへと変化していることを指摘する。

第一章「アポローンへの憧憬」

詩人としての名声を高めたいという野望と彼が思い描く詩の理想を，初期の詩に描かれたアポローン像に読み込もうとする。駆け出しの詩人にとって，詩神アポローンはまさに実在する生きた神であり，詩の世界は彼の治める広大な「黄金の国」に他ならない。自然の様々な音が作り出す霊妙なハーモニーはまさしくアポローンの奏でる音楽，繊細に研ぎ澄まされた心に詩的霊感が訪れる時は「アポローンの音楽が聞こえる時」である。アポローンの姿は天翔る「黄金の御者」，つまり太陽神。『眠りと詩』に描かれている御者は，神話的楽園世界を越えて人間の苦悩の世界に向かわんとする詩人の決意を表現するものへと成長しており，それはいわば詩人の未来の自画像となっている。先輩詩人ハン

トと月桂冠をかぶって詩の競作をしたが，後日戯れにアポローンの冠をかぶったことを後悔し，直接アポローンに向かって悔恨の歌を読む。このようにキーツにとって，アポローンは何よりも先ず，ポエジーの世界，そしてその栄光を象徴する神であったことを明らかにする。

第二章「エンデュミオーン神話とキーツ」

キーツが，己の才能を試すための大作のテーマとしてエンデュミオーン神話を選んだ理由を，彼の詩の特質との関連で考察する。エンデュミオーンは月の女神セレーネーに愛され，不死と望むだけの長い眠りを与えられたと伝えられているが，古来文学作品のテーマとして大きく取り上げられることはなかった。だがキーツは『丘の上に爪立ちて』において，エンデュミオーン神話の中に，その神話を生み出した遙か遠い古代への思いと，その背景となる自然の光景から詩的霊感を得るという，自然と詩人の想像力の共鳴による詩の創造の原型を発見する。しかも，この神話には，キーツの想像力との特徴となる「眠り」のイメージを喚起させる要素がある。更に，「月」は，彼にとって単に自然の美の象徴であるだけではなく，孤独な詩人に慈愛の光を投げかける存在であり，女性の美の象徴ですらある。つまり，女神を愛するエンデュミオーンの苦悩に，キーツは詩人の孤独と永遠への憧れを投影しているとする。

第三章「『エンデュミオーン』――キーツの愛の神話」

複雑なプロットからなるこの長詩は，その複雑さゆえ，これまで様々な解釈を可能にしてきたが，ここでは一貫して流れているテーマが「愛」であるとして，物語を追いながら，主人公エンデュミオーンの愛の成長と変容を考察する。エンデュミオーンの語る幸福論によれば，「愛」とは我と非我（外界）との合一状態であり，その愛の力によって，必滅の人間が永遠を希求できるのだという。女神を求めるエンデュミオーンの長い孤独な旅は，いわば，彼の愛が真の自我の殻を破り合一状態に達するための長い試練である。彼がその途上で出会う愛の神話の主人公たち（アドーニスとウェヌス，アルペイオスとアレトゥーサ，そしてグラウコス）は，それぞれにエンデュミオーンの愛の段階を示し，更なる成長を促す契機ともなっている。彼の偏狭で利己的な愛が，彼らによって，他者への共感へと高められていくのである。最後のそして最大の試練は，インドの乙女に変装した女神自身の仕掛けたものである。このプロットによって，キーツは，女神自身の愛にこの世の肉体の愛の喜びと苦悩を加え，エンデュミオーンの愛を完全無私の愛にまで高めることができたとする。

第四章「失われた神話の再創造――プシューケーの神官として」

キーツと神話との関係の新たなる段階を示す作品として，『プシューケーに寄せるオード』に着目する。遅れて登場した詩人キーツが，信仰の対象となるには生まれが遅すぎた女神プシューケーに親近感と同情を寄せたとしても不思議はない。詩人は女神のために信仰の世界を回復するべく，彼女の持たざるものを身に付けた，彼女に仕える神官になろうとするが，それは他ならぬ詩人自身の内面の問題の自覚でもある。女神の祭壇は，詩人の「蔭深き思考」によって，詩人自身の魂の「奥深い未踏の領域」に作られる。それゆえオードの後半部に描かれるのは，詩人の魂の風景に他ならない，プシューケーは語源的意味の「魂」に還元され，詩人の魂の内に取り込まれてしまったのである。この詩は，その意味で，「内面」の発見というロマン派によって開発された新しい詩の領域の，高らかな宣言歌として位置づけられるとする。

第五章「大海の孤独――キーツの歴史意識」

キーツの歴史的時間，あるいは永遠に対する意識のあり方を，初期から後期に至る様々な作品を通して解明しようとする。彼の場合，歴史的時間はしばしば「大海」のイメージによって，広大な空間の広がりとして体験され，時間意識は死すべき存在としての自己意識をともない，茫漠とした空間の中の孤独感として表出される。この存在の不安を伴う歴史意識は，とりわけ永遠に凝固したかに見える古代の芸術作品と対峙した時にいっそう先鋭化してくる。18世紀の「崇高」という美意識は，キーツにおいて，死すべき存在が抱く時間意識のバックライトとして変容を遂げたのである。『ヒュペリオーン』における，没落した巨人族の姿とそれを取り巻く風景にその典型を見る。『ナイチンゲールに寄せるオード』では，永遠を意識さす契機として，鳥の音楽に注意が向けられる。そして，遂に『ギリシア甕に寄せるオード』では，詩人が存在の孤独の恐怖に耐え切れず，永遠についての思考を停止してしまう。「美は真実なり，真実は美なり」というキーツの審美主義的姿勢は，彼の歴史意識と永遠の意識の葛藤の所産であったのだ。

第六章（結論）「アポローンの再生」

キーツが辿り着いた詩人像とは，詩人に求められる「知識」とは，一体，いかなるものであったか。それを明らかにし，全体の締め括りとするために，ここで，『ヒュペリオーン』に描かれた神としてのアポローンの誕生の苦痛と『ヒュペリオーンの没落』に描かれた「記憶」の神ムネモシュネーによる詩人になるためのレッスンを重ね合わせる。その結果，彼が掴んだ理想の詩人像は，人間の苦悩を癒す「医者」としてのアポローン像に近づくことであり，そのためには「美」に対する感受性と「哲学」（人間の苦悩についての知識）を持合せ，深い思考に基づいた「快き哲学の調べ」を紡ぎ出し，世の人々の苦悩を癒すことのできる人ということになる。そして，キーツ自身，そのような「慰め」としての詩に向かいつつあることを指摘して結論とする。

論文審査の結果の要旨

本論文は，John Keatsの描くギリシア・ローマの神話世界の情景や神々の姿が，制作年代を追うにつれて，官能的快楽に満ちた楽園世界から，不安と苦痛に満ちた闇の世界へと，そして語り口においても，遙かなる世界への憧憬と共感から，神々への内省的な問いかけへと変化していることに着目し，その推移の中に，詩人の成長を見ようとするものであって，以下のような構成になっている。

第一章，詩人としての名声を高めたいという野望と彼が思い描く詩の理想を，初期の詩に描かれたアポローン像に読み込もうとする。キーツにとって，アポローンは何よりも先ず，ポエジーの世界，そしてその栄光を象徴する神であったのである。

第二章，天上的美への憧憬とそれを手に入れることのできぬ苦悩を，初期の詩に繰り返し語られる「月」と孤独な詩人との関係の中に読みとり，最初の大作の題材に，エンデュミオーンと月神セレーネーの神話が選ばれた必然性を明らかにする。

第三章，『エンデュミオーン』の解釈を試みる。キーツは，僅かなエピソード的神話に彼自身を投影させて，４千行を越える長詩の中で，新しい神話を創造した。主題となっている神話のほかに，様々な他のギリシア神話が取り込まれ，話の筋も複雑になっているが，全体を貫くテーマは「愛」であり，すべてのモチーフがエンデュミオーンの愛の成長過程として解釈できるとする。

第四章，キーツと神話との関係の新しい段階を示す作品として，『プシューケーに寄せるオード』

を取り上げる。古代神話の世界と自己との隔たりを，喪失の意識の上に立って，古代の神との新たな内的関係を打ち立てる過程をこの作品の中にみる。

第五章，キーツの歴史的時間，あるいは永遠に対する意識のあり方を，初期から後期に至るさまざまな作品を通して解明する。繰り返し用いられる大海のイメージの中に孤独な時間意識を読み取ろうとする。

第六章，『ヒューペリオン』と『ヒューペリオンの没落』に焦点を合わせ，＜記憶＞の女神ムネモシュネーとモネータの言葉の解釈を通して，深い思考に基づいた「快き哲学の調べ」をもって，世の人々の苦悩を癒す「慰め」としての詩に，キーツが向かいつつあることを指摘して結論とする。

本論文は，以下の点において，高く評価されるものである。

第一に，本論文は，キーツによって語り直されたギリシア・ローマ神話－キーツによる神話解釈－の意味を，詩人としての成長過程に即して，解明しようとしたもので，ロマン派の詩人達が古典神話に新しい意味を与えたとするDouglas Bushの説を，キーツにおいて実証したものである。これまでも，彼の詩とギリシア・ローマ神話との関係に着目した研究が為されてきたが，その多くが，個々の作品解釈を進める上での注釈の域を越えるものではなかったことを考慮すれば，この視点はきわめて野心的で，独創的である。

第二に，外部的な伝記上の事実による予見を一切排除して，専ら筆者の関心に引き付けて，作品を脱構築し，そこに詩人としての成長過程を読み取ろうとする姿勢は，今日の批評理論を充分咀嚼したもので，説得力がある。

第三に，キーツの創作活動を一貫した成長過程として捕らえようとするところから，これまで等閑視されてきた作品にもそれなりの意義を与えている。しかし，そのために，作品としての完成度が高く，代表作とされてきた一部の作品が対象外とされる結果となったが，それは，本論文が審美的な作品分析を求めたものでない以上，やむを得ない事である。

第四に，シェイクスピア，スペンサーらの神話受容，チャップマン，ジョージ・サンズらの翻訳など，時代とともに変容する神話の重層性にも細心の注意を払い論の補強に役立てている。

以上のように，本論文は，最新の研究成果を渉猟した上で，独自の視点を持って纏められた野心的なキーツ研究であり，イギリス・ロマン派研究に一石を投じるものである。

以上の審査結果に鑑み，本審査委員会は，論文提出者松家理恵が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。